

子宮移植に対する Mayer-Rokitansky-Küster-Hauser 症候群女性のレシピエントとしての意識調査

堤下ゆきな 1, 2)、林文子 1, 3)、松本亜樹子 4)、森本義晴 5)、菅沼信彦 1)

1) 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻

2) IVF なんばクリニック

3) 大阪医科大学看護学部看護学科

4) NPO 法人 Fine

5) HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】生殖補助医療ならびに移植医療の発展に伴い、子宮移植の臨床応用が始まり、2014～2016 年には 6 例の妊娠・出産例がスウェーデンから報告されている。そのレシピエントの大多数は先天性に子宮・腔を欠損している Mayer-Rokitansky-Küster-Hauser (MRKH) 症候群の女性であり、当該疾患患者の認識と意向は子宮移植という新たな生殖補助医療のわが国における今後を考える上で、重要な情報を提供するものと考えられる。

【対象と方法】MRKH 症候群の 11 例 (18～40 歳、うち既婚 5 例) を対象に、子宮移植に対する認識ならびに意向に関する 11 項目のアンケート調査を行い、さらに成人 9 例に対してはインタビュー調査を施行した。これらの研究は、当該施設の倫理委員会の承認、ならびに対象者への説明と同意を得て行った。

【結果】挙児希望は 6 例 (55%) に見られ、子宮移植への興味も 10 例 (91%) に認められた。しかしながら、挙児の方法 (複数回答) としては養子縁組が 8 例 (73%) と最も多く、子宮移植は 7 例 (64%)、代理出産は 4 例 (45%) であった。子宮移植に関するリスクを理解した上では、子宮移植を希望する者は 5 例 (45%) であった。インタビューの解析結果としては、「自分の体で児の存在を感じられる」、「主体的な妊娠・出産が可能」などの点から、子宮移植を選択肢の一つとして認めるが、「生命維持に必要な子宮」、「ドナーに対する葛藤」などの倫理社会的側面からの問題点や、法的ならびに金銭的な壁を苦慮する意見が聞かされた。

【結論】子宮移植は MRKH 症候群女性にとって前向きな希望のある治療になり得る可能性が示唆される。そのためにも子宮移植がより安心・安全な技術として確立され、社会的にも許

容される医療となることを、MRKH 症候群女性はレシピエントとして望んでいると推察される。